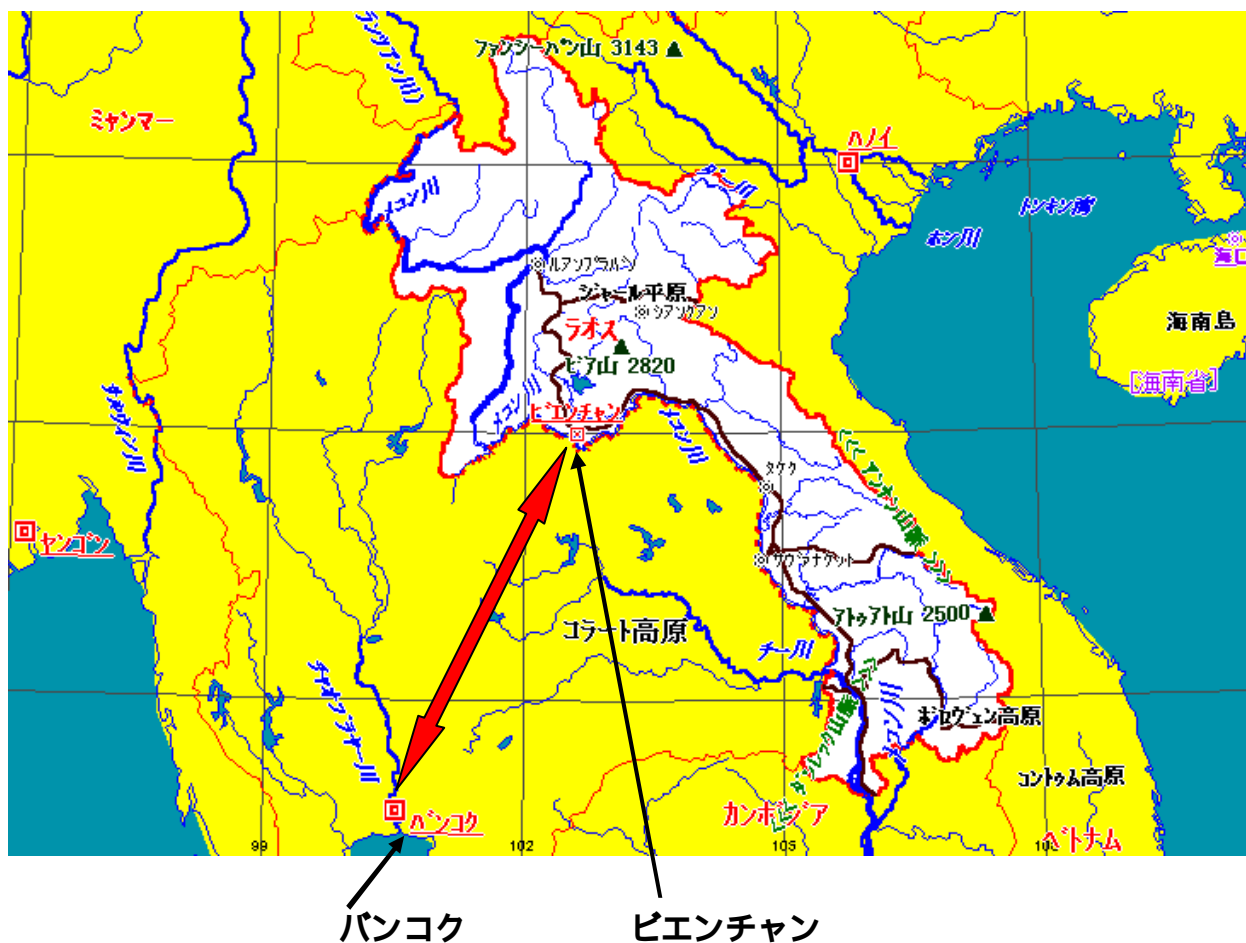


# ラオス（1990年）

事務所の女性に声をかけられた。「何処の国へ行くのですか？」「ラオスだよ」と答える。「ラオスのどこですか？」聞かれ、「ビエンチャン」と答えると、「ああ、カンボジアですか。行ってらっしゃい。」と送り出された。

ラオスはあまりなじみのない国である。日本の2/3の国土（24万km<sup>2</sup>）に約500万人の人たちが暮らす。主要産業は農業、林業、水力発電で、工業化は進んでいない。観光資源も少なく、本屋さんでラオスの観光ガイドブックを見つけることは難しい。山岳地帯のため、道路網は整備されておらず、人や物の輸送にメコン河が果たす役割は大きい。首都ビエンチャンはメコン河沿いにある。



日本の経済協力でビエンチャンに河川港が建設され、港を建設したジェネコンの現地所長から、次の情報がもたらされた。「ラオス政府はメコン河を航行する船舶と造船所の拡充を図りたい意向、については造船の専門家をビエンチャンに派遣願いたい。」

このとき、私はJR東日本向け車両工場の計画に参画していたが、海外事業部長の指示により、ビエンチャンを訪問することになった。単独行だが、勝手知ったバンコク経由なので、緊張感はない。バンコクから約1時間、タイ航空のフライトを楽しんだ後、予定通りビエンチャン空港に降り立った。

## 1 ビエンチャン

小さな空港の簡単な入国審査を終え、街へと車で向かう。「太陽と緑の国」と呼ばれるように、降り注ぐ太陽がまぶしい。視界を遮る高層ビルがなく、椰子の木や広葉樹の森が緑の豊かさを感じさせる。空港から15分程でビエンチャンの街に到着した。行き交う人や車は少なく、のどかな街である。



ペンション風のホテルに投宿する。仕事や観光で訪れる人が少ないから、大きなホテルは必要ないようだ。街のレストランもごんまりしている。特筆すべきラオス料理はなく、フランス料理がメインである。インドシナ半島が長くフランス領であった名残である。バスケットに盛られたパンはフランス風味で確かに美味しい。まずいラオス米は敬遠し、滞在中はフランスパン党に所属した。

## 2 メコン河

水路局の人に案内され、メコン河沿いの港と造船所を見学した。雨期と乾期でメコン河の水位は大きく変化する。そのため港は人やバイクがアクセスできるよう階段や斜路が設けられた構造で、造船所には船を上げ下げするスリップウエーが川底まで延びていた。ビルマのイラワジ河、バングラデシュのガンジス河と同様、河の水はコーヒー色で、行き交う船も似たような型が多かった。

## 3 観光



凱旋門

町を車で走るとパリの凱旋門に似た建物が望まれる。戦没者を慰霊するため、建てられたという。内部の天井には仏画、階段を上ると仏像が飾られている。上部のテラスに出るとビエンチャン市内が一望できる。経済不況でセメントなどの資材を調達できず、未だ完成していないと聞いていたが、もう完成しただろうか？

市内にあるワット・パケオという寺院を訪れた。別名「エメラルド寺院」と呼ばれているが、バンコクのエメラルド寺院ほどきらびやかではない。内部は博物館になっており、仏像などが陳列されている。

ワット・パケオ



郊外にある**仏陀公園**へ足をのびした。寝釈迦像を初め、いろいろな仏陀の像がユニークな顔立ちと姿で迎えてくれる。ほかに観光客は見あたらず、静かな木陰で昼寝をするには絶好の所である。学生らしきカップルが近くの木陰で談笑していた。しばらくすると、後部座席に彼女を乗せ、若者のバイクは走り去った。ほほえましい彼らの姿は、バングラデシュでは見られなかった光景である。



帰路、ピエンチャン空港でタイエアの搭乗を待っていると、隣のゲートにベトナム航空のフライトアテンダントが現れた。ベトナムのコスチュームに包まれた彼女たちは皆スタイル抜群の美人ぞろいである。ハノイ行きのフライトに乗りたい誘惑に駆られながら、バンコク行きに搭乗した。